



Dr. 健康コラム

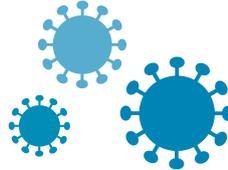
オミクロン株の特徴と今後の課題

城里町国保七会診療所 上井 雅哉

令和3年末からオミクロン株の市中感染が急増し、流行の第6波をもたらしました。感染力の強いオミクロン株が広がり、医療従事者の感染者や濃厚接触者が増えて病院機能の維持が困難となった事例もありました。2月に入りピークを過ぎましたが、感染者の減少速度が鈍く、次の大流行に備え予断を許さない状況にあります。

○オミクロン株の特徴

- ・ 感染力の強さ
- ・ 重症化リスクの低下
- ・ ワクチンによる感染予防効果の低下

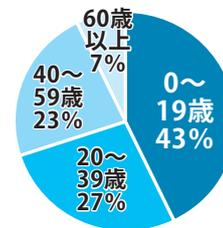


表面突起の
スパイク蛋白が変異

オミクロン株は、変異によりスパイク蛋白の構造が変化したことで感染性が増し、従来株に有効であったワクチンの感染予防効果が落ちてしまったと考えられます。

また、第6波流行の初期では、活動性の高い20～30代の感染者が最も多かったのですが、時間の経過とともにさらに若い世代、なかでも小学生・未就学児の感染者が急増しました。3月30日の茨城県発表の資料では、右のグラフのとおり、新規陽性者の43%が20歳未満で最も多い割合となっています。オミクロン株による第6波は、免疫を持たない小児での感染拡大と、ワクチン接種者やすでにかかった人にも感染しやすいことが、急激な拡大を招いたと考えられます。

感染者の年代別割合



○オミクロン株の臨床症状



オミクロン株の臨床症状は、従来株で重篤化につながるとされた肺炎症状は少なく、鼻汁、喉の痛み、頭痛などの「上気道炎症状」が主要症状です。無症状の患者も一定程度おり、全体として重症化リスクは少ないとされています。しかし、オミクロン株でも高齢者の重症化リスクが高い点は従来株と同じで、第6波においても一定数の高齢者に基礎疾患の重篤化や発熱から食べられなくなり衰弱に至るケースが見られました。また、高齢者施設でのクラスター発生後、入院できずに重症化するケースも散見され、施設でのゾーニング指導や医療介入支援のあり方などが議論されました。

○重症者、死亡者を少なくするために

オミクロン株で重症者が少ないこと、今後出現する変異株の重症度は別の問題です。変異株は免疫不全者の体内で長期間持続感染するうちに、変異が繰り返り起きた結果であると推測されるため、必ず軽症化していくわけではないのです。

第6波の経験から、高齢者の死亡率を下げるのが今後の課題といえます。ワクチンの効果は時間の経過とともに下がりますが、追加接種により発症予防効果が一時的に引き上げられるほか、重症化リスクをさらに大きく減らすことが示されています。前回接種後6か月以上経過している人は、追加接種(3回目)を前向きに検討していただきたいと思います。

また、5～11歳の子どもについてもファイザー社製ワクチンの接種が始まりました。一定程度の副反応の可能性があるため、接種をすべきか悩まれるかもしれませんが、小児用のワクチン量は成人(12歳以上)の3分の1に減量されているため、副反応が成人と同じか少ないと考えられます。感染症予防の効果と副反応のリスクについて十分ご理解いただき、疑問や不安な点があれば、お気軽にかかりつけ医等にご相談ください。

オミクロン株の感染リスクが、2回目の追加接種により2分の1に、3回目では3分の1になったとの報告があります。

